樣孫案孫

四

太政官文庫

五冊	四架	九八函	一一六九七號	和書門

内閣文庫

一八二函 一四冊	五冊	一一六九七號	類	和書

内閣文庫

番號	和 11697	
冊數	5 (4)	
函號	183	629

国立公文書館
National Archives of Japan

二百四十八番　四

全五本

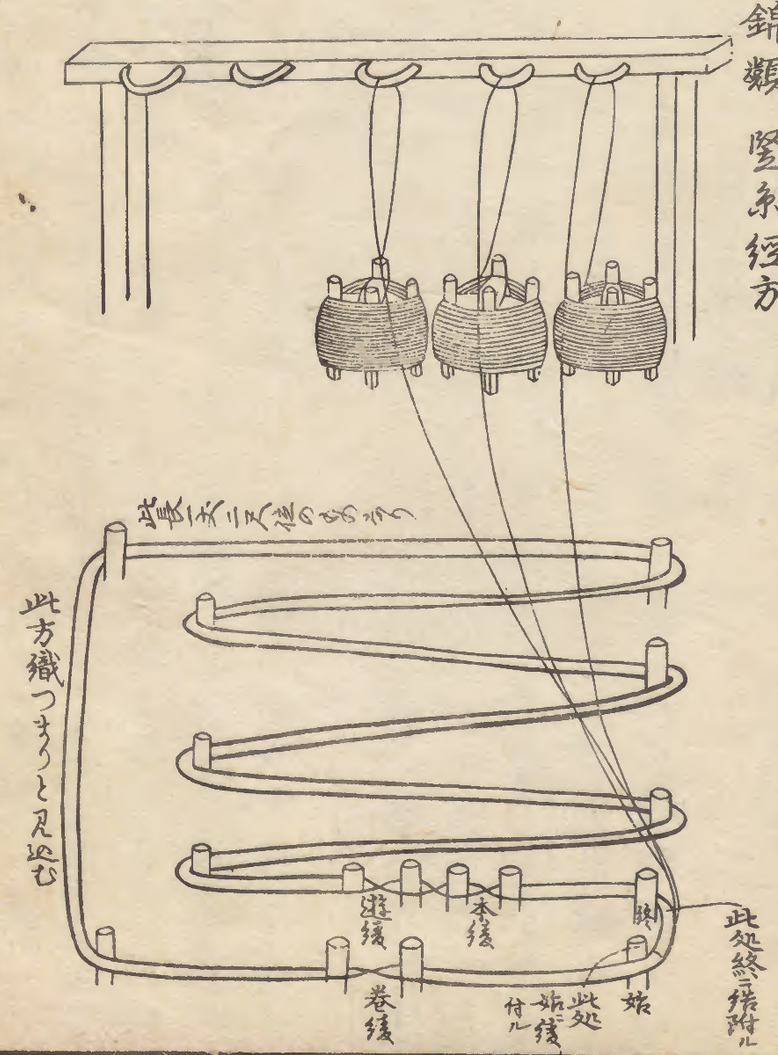
機織彙編巻之四

錦織製方

一初蚕より取上る糸をまさる沽ひ亜より次に養へ取
亜し其糸を水に湯にてあらし二本合て茅に取
つむにを捻を捻りあらら養へ取るこ　跡先の糸
はを留てこかにして而こを三つめこふ編なり支
より養を外し煉なり煉上て水にて濯き乾し上
濯るこ濯土又糸はさるにてそさき干上るこ
色によりて天日を嫌の黒ハ晴天に干上け紺花色
とはし藍淡黄又ハ紅色かなり　ぬハ蔭干こ　右干上け
て糊とするこ方糊なり堅糸の糊いふのりと丹色横糸
の糊へ色によりて糊左糊又ゝびのりを用ゆ又葛
を用ゆるより大概ふのりふ糊なり糊の引方口伝

一三本さゝまれハ三本の様ゝ糸数と宜敷ゑこからゝの
糸ハ別ゝ延るまり尤本綾の糸より八少し細しからゝ
糸ハ不炼生糸(ねりきいと)にて染るまり延縮りて糸を切り本綾
の方よりくさりゝ名まり夫より庇綾の方より巻初るゝ
尤けんちやうへ荒ゑさを付 縢(とぐち)の本へ糸を巻付るまり

錦類 竪糸(たていと)経方



一本機を引廻夫より伏機を引亜〜筬を引通すより都合三度迄通すと筬を引亜〜其糸をつまぎの本へをくひ糊をよく張付る上を紙をて押へまるゝを能乾すべ〜但〜えとり織付あれハ引〜綾組まれハ糸をつなぎ引通すより糸のつまき方ハめ字迄ゝ

るゝ仕

一横糸ハ竪糸の如くする糸を五本位一節〜て織るゝ心を糸ゝ落糊を用ひ何機をても能さるハ生糸を横迄織るゝ然とも生糸ハ弱すり強くするゝ妹るゝと紋べ〜花紋迄出る而の横糸ハ妹糸ゝ心糊なし

一横迄幾通りも色を替へ模様織るゝ横経糸迄印あり是ハ紋を拾ゝ時迄市を附るゝ

一紋を織杼と地を織杼ハ別る分け亜るゝ

一右の仕方にて地横斗本綿を織り紋へ指糸を織ハ則綿錦と名付るゝ

一筬柄の数目ハ四五百目位ゝ一尺五寸幅筬廿八ゝ

ゝり綾取ハ十四枚木ぐゝ六枚伏ぐせ六枚ゝの綾ゝ二枚ゝり筬一目へ竪糸三本入外迄ゝの糸一本都合四本入ゝり踏竹ハ六本地合ハ大方堅地ゝり

一ふぐせからゝ耳糸ゝを不殘下坪へ竪糸ハ引亜す本機ハ不殘上坪へ引通ゝり

一踏竹へ綾取の糸を付るゝ〜ゝ不合格迄附るゝり二の木ぐゝ二のふぐせ二のからゝハ一の踏竹迄附る五の木ぐゝ五のふぐせ一のからゝハ四の踏竹へ附る三の本機三のふぐせ一のからゝハ二の踏竹六の本ぐゝ六のふぐせ二のからゝハ五の踏竹四の本ぐゝ四のふぐせ二の

からゝハ三の蹈竹一の本機一のふぐせ一のからゝハ六の蹈竹ゟ附る片足まて一二三に五六と順ゟ蹈べし尚ゝ伝あり

紡織方

一筬一目ゟ竪糸四本入るゝ是を四入と云上糸二本下糸二本外ゟからゝ糸一本入て都合一目へ五本入るゝ故地合ハ平綾ゝ先右之方ゟ糸七差初め下糸七二本一同ゟ一の本ぞゝへ引通し夫ゟ一のふぐせへ引通し外の本機伏機へハ引通すゟ不及ゟ次ゟ上糸七二本一目ゟ二の本ぞゝ二のふぐせへ通し殊ゟの一本のからゝ糸七べ一のからゝの綾ゝへ引通ゟ是ゝ筬ゝ目の一ッ目の竪糸引通し殊ゟ筬二ッ目以下筬ゟゝまても仕方皆如此

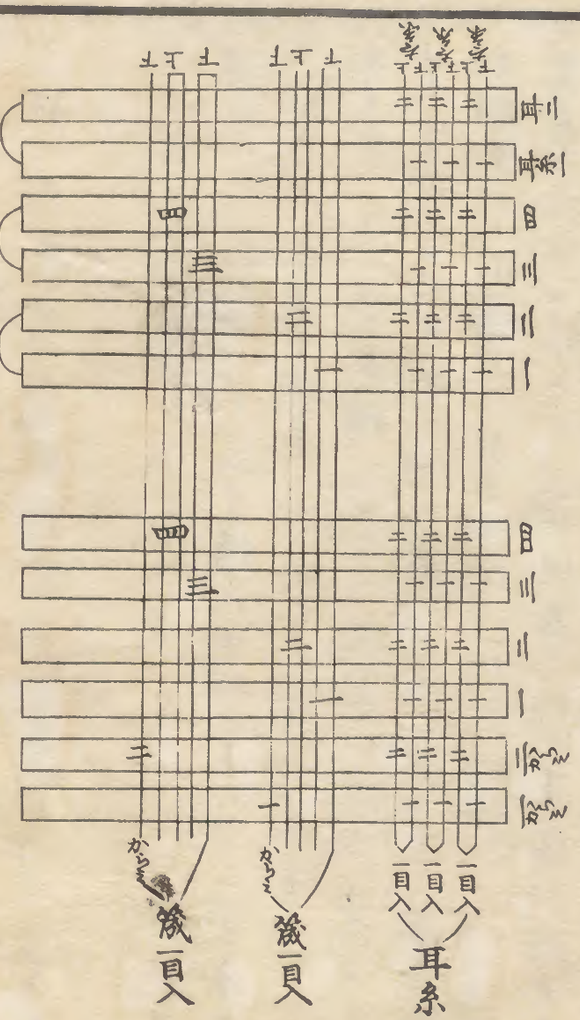
一本機四枚目糸本ぞゝ二枚伏機四枚からゝ糸ふぐせ二枚合て綾ゝ十二枚有之尤二所ゟ分ち上糸下糸

七つゟ綾ゝの下へ麻糸七付蹈竹へ結附る竹の蹈方ゟ随ひ綾ゝゟ織ゟの綾ゝ七ふぐせと云ゟて釣ゟ後の綾ゝ七本機と云ろく孫ゟ然て釣ゟゟ経ゟ竪糸七巻く本七艠と云本綿機と遠ひ経たる糸七糸七巻て夫ゟ綾ゝへ通して後ゟ筬へ通すゝ夫ゟ織なゟ巻本七はきと云筬へ通し糸の端七つま本へ糊付して上ゟ紙ゟて張り乾上て糸の不動ゟ織始ゟゟ尤本機ハ上糸下糸ゟからゝゝゟなの上坪へ竪糸七通し伏機ハ上糸下糸ゟからゝゝゟなの下坪へ引通すべし何機ゟても綾ゝの通方ハ如此ゟ

一踏竹六本内四本ハ地糸二本ハ耳糸ゝ竹ゟ一の本機ふぐせハ一の蹈竹へ附る二の本ぞゝふぐせハ二の

踏竹三の本機ふくせハ三の踏竹ハの本機ふくせハ四の踏竹ニ耳糸本ゝの一の下糸をバ一の耳糸竹へ付る耳糸本機の二の上糸をバ二の耳糸竹へ附る一のゝゝ糸の下糸をバ耳糸の一の踏竹へ附又三の踏竹へも附ゑ二のからゝの上糸ハ耳糸二の踏竹と地竪の二の踏竹へ附るゝ

一踏竹の踏方ハ一三の踏竹を表ゑて一回ゑ三四すも踏下け 綾口吸(くちすゝ)ゝ表ゑ横杼を投通し筬を打附夫より一三の竹を足をおろし表ゑ一の耳糸引りを踏む此時花機ゝて通糸を引ゝ絡ぬきの横糸の杼を投け通し筬打附る又二四と表ゑて踏ゝ杼を投通し筬を打附るゝ夫より二四の竹を踏ゑ二の耳糸竹引りゝゝ花機ゝて綾を引杼を投通し筬を



附るゝ筬ゑも如此ゝて織るべし但し一の踏竹より四の竹ハ地合を織て花紋をハ不織ゝ両端のからゝの附ゝる耳糸竹を踏時ゝ花紋を織と知べし

本機ゝ分ゝ理と象ゝ

右綾丸へ竪糸く通方と異る耳糸通方ゟ錦倭錦新
如此耳糸ハ筬三目と糸錦ハ耳糸筬二目ゟ通るなり

倭錦織方

一綾丸十二枚筬一尺五寸幅二十八ゟ一目ゟ竪糸三本
入からく糸なく地糸ゟてからむ蹈竹九本
一おも耳さ〳〵方本錦とは〳〵花紋の横糸ハ蚕より取
るなり生糸を七本様て上け饗へ糸り燥りて染るなり
を糊なし〳〵不捻〳〵て糸と何機ゟも本地の糸とおゟく云地の両耳糸と云なり
一竪糸ハ捻りて燥るゝ横の地糸ハ六七本位引揃の生糸
なり横糸ゟ捻糸を用ゆれハ地合すき裏の色見ゆる
かゟ捻ざる糸を用ゆるなり
一花紋の横糸六色あれハ六挺杼を要するならハ横經六ツ

捨て一杼ならでハ不織なり左道作なき物ハ六色なり
横經を捨へハ地も六通り織れるなり
一本機ふくせより蹈竹へ糸附るゟハ中三本の本機
と両脇の蹈竹一ハゟ不成様ゟ附べし混雜する様
附てハ織れざるなりに付なり
一地合ハ竪地なり左地糸の横を織り花横ゟて紋を引
花紋の色糸を織るを時ハ蹈竹一本蹈さけて杼を
投る尚に付なり

納錦織方

一筬一すゟ羽数三十枚位ひ通くなり入用ハ花紋織る
竪糸諸捻ふて筬一目へ片糸を入る巻の表の如ふ
竪糸見えぬゟふゟ横糸を込て織へし横糸を法捻ゟて
織る紋からハ下絡を織ふ出て竪糸の裏なり押付

彩色ゟ其色の横糸ゟて一ふ宛菓沓を作る如くゟ
めゝ付るゝ時ゝ地横も竪の糸位ゟ四ッ目ゟ筬(ル)抜ゟ
さすゟ〳〵横糸絞を縫てつなきゟ織ふゝ

一袖織ハ横糸緒捻りを至て強め込ゟ筬ゟこゝ打込
ぐゝさ部鉄鋏ゟて打込へし

一綾元ハ本機ゟ〳〵伏機六枚ゟり筬一目へ二本ッゝ入綾
元へハ糸一本ッ通す踏竹二本一の竹へ二三の糸ぐせ
を付二の竹へ四五六のふぐせを附る踏方ハ片見ゟて
竹一本ッ踏へし

緞子(どんす)織方

一筬ハ幅一尺六寸三十ゟゝ一目ゟ竪糸五本入ゟらゝ糸
ゟ〳〵耳糸ハ八目ゟ〳〵綾元二十枚踏竹十本ゟり

一横糸ハ生すか五本位引揉の糸ゝ煉て織る時ハ四本位

捻りて煉るへし〳〵引揉と云ハ上ふの物ハ竪糸ハ煉り横糸ハ生糸を織るゝ下ふの物ハ横竪ゟもふ煉るゟり

一糸ハ隻(ひと)巳十を立五かへり元て一よゝゟ成るゟり経方のめや元ハ錦ゟ〳〵し

一耳糸ハ筬(とち)一目ゟ二本ッて八目ゟり綾元ハ本機斗りへ通す糸一本ッて綾元へ入る一の本ゞゝへ一の下糸二の本ゞゝへ一の上糸三の本ゞゝへ一の上糸四の本ゞゝへ筬二ッ目の一の下糸五の本ゞゝへ一の上糸六の本ゞゝへ二ッ目の上糸八の本機へ二ッ目の上糸九の本機へ二ッ目の下糸十の本機へ二ッ目の下糸を通すゟり三ッ目四ッ目五ッ目六ッ目七ッ目八ッ目皆是の例ふて知べし

一蹈竹附方一の竹へ本ゞきの一ふぐせの七を附る二の竹へ三の本ゞき九のふぐせ三の竹へ五の本ゞき一のふぐせ七の竹へ五の本ゞき五のふぐせ六の竹へ六の本機二のふぐせ七の竹へ八の本ゞきのふぐせ八の竹へ十の本機六のふぐせ九の竹へ七の本ゞきハのふぐせ十の竹へ九の本機十のふぐせを結附るなり

一蹈竹蹈方ハ一六二七三八四九五十と二本宛両足ゝて蹈むなり

厚板織方

一竪糸二本揃ゝて四ツ入と綾元へハ二本宛通すなゝハ織五すゝて十ようの時ハ一すゝ付八十枚なり幅五すゝて織目数四百ある故綾元も一枚ゝ四百本ツゝ拵るゝ本機の二枚合と八百筋ふぐせ二枚合せて八百筋但し二枚

織ゝてハ綾元込れ四枚ゝなて八枚織紙けれとも八枚ゝてハ元具数多く織方も細くゝて殆らハ一枚ゝ二枚ゝて織目をあらくすれハ綾元込ゝ不合織目あらくなても竪糸たく仕立れハ織目細くす細竪ようも地合返てよし又綾元を極細ゝすれハ込ゝ合ても織よし右ゝ付織目縣尺ゝて一すゝ付七十枚ゝ織一すゝ付七十枚立ゝて竪糸ハ繭八ツ附位の糸を四本ようふてよし是繭三十二附とゝなり依之繭十附の糸ハ三本捻ゝて良しからゝ糸ハ捻ゝ生糸ゝて大概桃色ゝ染て用ゆべし地合何色ふてもかからゝハ桃色なとゝ心ゝ得べし但一本糸のようなし故極上の細き糸ゝあらざれバ糸切るゝ織方綾を引時ハ細き糸ゝ糸を二本ようゝて用るゝ捻ゝる糸生糸ゝてハ切ゝる時ハ戻りて竪糸ゝかゝまり滞る

於て生糸にてもよく湯煮をして用ゆるなり又米ぬかの絞出しにて右糸煮るもよきなり此搓の戻らぬ為めに煮るなりからミ糸ハ成たけ細きを用ゆるなり

一大凡の仕立を記す織幅ハ糸数を改むへし織幅一寸六分此にて織幅耳ともに八寸ようなる織幅ハ

ミ付七十枚立にて二十二ようミ半此目数九百目宛あり但し耳糸ともあやを木ぐと掛内八寸六分一枚糸の数九百筋三枚ふくせ糸数四十二枚是よからミ糸一目一本宛入る為からミ竪九百筋是を綾を二枚ゑ掛る

為からミ綾を八一枚四百五十本宛之を之の時伏織弓四挺にて二本の弓ハ地竪のふくせに附二本の弓ハ

からミのふくせに付木ぐとハ一本にて綾を二枚附なり

一絡貫糸ハ捻のなきを良とす若捻なる糸を合せる時ハ細き糸を澤山合せて掛る積りなり

一地竪白茶色の時ハ絡貫黒紋黒にして色さし濃黄紫濃き蘭黄子稗色なと色さしハ金糸ゑ又ハ平金箔もよし

一地色花色の時ハ絡貫白茶くゝ黒紋ふしにて色さし濃子稗黄ゑ糸の縁り共なるとよし金糸のからゑを色濃き金茶の糸なともよきなり

一地竪ハ常の通り下の縢を巻きからミの竪糸ハ常の上を巻なり但向ハ低くともに中程にてからミ竪ハ常のにのあくやど揚て垂なり

一惣織物ゝ竪糸糊の仕方竪糸百目ゝ付水五六合入の酢ゝて二ッ柳のり三匁葛粉ゝ匁五ト銀ゝやうふ等分ふして白懸大豆粒程一ッ入揉の油又ゝらゝめゝし（但ゝらゝ名ハいゝる胡麻油）右油ハ小鍋ゝて二ッ程入て煮立し処へ入て暫時ゝ煎り煎り夫ゝりおろし冷てゝやうふの粉十匁程入る但し蕨の粉ゝてもよろし竪糸へ付るゝ附方ハ竹へ掛ゝてゝくゝり

一惣ゝの織物横糸糊の仕方柳ふのりゝやうふ葛粉右三品等分ゝ煎りてゝくゝびの粉ゝ入糸へ揉附絞り横竹ゝて干し上るゝ

光絹（ハぶたゝ）織方

一織ハ二十五ゝゝ一目へ竪糸四本へ綾ゝふぐせ二枚ゝ横糸ゝ四本へ織ゝ蚕六ッ七ッ附位の引揚の糸ゝ用ひ但し平綾ゝり絹機ゝて織る時ハ綾ゝ掛緒（ゝけを）ゝてよし織

柄ハ二百目位

素細（りゝゝん）織方

一織二十二三ゝゝ織柄ハ三百四五十目位光絹ゝり糸二三段ゝ右ゝ引く織一目へ竪糸四本入横糸ハ八本ゝて織ゝ平綾ゝり其外光絹ゝ同し

諸（もろ）繒（ゝん）織方（并）絹

一織ハ二十三四ゝゝ織柄二百三四十目竪糸ハ光絹ゝ少し右ゝ引べし織一目へ四本入横糸ハ四本ゝて織ゝ其外如前又常の絹ハ織一目へ二本入ゝ平綾ゝり竪糸繭七ッ八ッ附ゝ

一右三品ゝ絹炼方ハ早稲（ゝら）藁の灰又ハ桑木の灰ゝ用ひ又掘木の灰もよし撹然掛方ハ本機ふぐせの掛糸ゝ用ひ

綸子織方

一綾ハ幅一尺四寸三十よりみゝして一目へ一本さゝの四ッへあり糸数ハ本入る但ゝからゝ糸まゝ左生糸ゝ耳糸ハ目位ゝ

一糸ハ白さ銀の絡き糸にて極上の糸と用ひ竪横とも水生糸ゝ横ハ三本引揃にて織るゝ織裏ゝ表ゝ成と知べゝ織除て炼るゝ藁灰と用ひ左めくの加減ゝハ仍めり

一耳糸ハ五本位引揃の太さ糸と用ひ惣て何の機ゝても耳糸ハ太ゝするあり

一綾元十六枚（本機ハ枚ゝゝ八枚）踏竹八本別ゝ一本休竹あり一の竹ゝ一の本機六のふぐせ二の竹ゝハの本ゝゝ一のふぐせ三の竹ゝ七の本ゝゝハのふぐせ五の竹ゝ五の本ゝゝ二のふぐせ六の竹ゝ八の本ゝゝ五のふぐせ七の竹ゝ三の本ゝゝ八のふぐせ八の竹ゝ六の本ゝゝ三のふぐせ踏方ハ片足にて一本ッゝ順ゝふむあり

一耳糸ハ一目ハ一の糸本機ふぐせ次の上糸ハ三の本機ふぐせ通ひ二目の一の下糸ハ五の本ゝゝふぐせ次の上糸ハ七の本ゝゝふぐせ〳〵通ひ三ッ目の一の下糸ハ二の本ゝゝふくせ次の上糸ハハの本ゝゝふぐせ四ッ目の一の下糸ハ六の本ゝゝふくせ次の上糸ハの本ゝゝふぐせ〳〵通すあり左右ハ

一紋ハ一目撰と云又二目撰と云あり又一目半撰とあり

紋模様次第あり左一目撰と云ハ綾目ハ本めれハハ本八本すゝふあり二目又一目半右ゝ准して可知

縐紗織方

一綾幅二尺三寸五十よりゝ糸ハ四ッへめ元八枚踏竹

口伝なり

一竪糸ハ生糸にて經て糊を引く糊の仕方ハ白米を水に浸し挽て絹篩にて濾し たゝへべの粉一斗あるハ 口合とのりに煉りあけ 礬る六合を煉りたるのりに加へ 米砂糖差菜種油とさゝて加減として糸に付るなり 此加減口傳あり

一横糸ハすゞ三本位を一本に捻り用ひ 捻方ハ右捻左 捻にしてよるなり 織時ハ右捻りの糸と二杼織り次に 左捻の糸と二杼織なり糸ハ尤生糸に

一踏竹のふミ方ハ両足にて一三二口と踏む

一織上て糊氣をぬき庚申にて煉りて深るなり 糊抜方ハ 湯へ浸し揉にて抜事なり口傳あり

一織なり織下しの時ハ必ず巻〻 干上て後 必ず巻口傳あり

一糊〻大方酢を入れ油をさせバ糸ふくれ 糸もやらかなる生粉を入れハのりのねばり気を去るなり 其合方の分ハ糸を得 考して其加減あるべきなり

一二尺三寸幅に織り上げ 必ずれハ二尺幅と成る 其余の幅の考をすべきなり

一縞綾紗ハ二尺三寸幅に織上げ二尺一寸のゆし 内を位につまるゝ所 糸ハ尤結りめんハ生糸を捻り夫 なり煉り上げ深て糊をして 織に仕るゝ 横糸も 同糸なり

風織綾紗織方

一四杼返しと云 右捻糸左捻糸二杼宛四杼織と又 捻を不無糸を四杼織て初に返るなり

一四ッ入八丁篋五互五返り位之経之但し目弧二ッ之
目方重き物五十より太ぶ大きなるかるき物五十
二より位太ぶ細きハ太ぶ煉て出るなり
一ちりめん横ハ三寸位より四五寸位一疋付四ッ入竪横共
糸目方三百二三十目位有之なり竪ハ百二十目位ちり
めんを六百目位一ッ入横三寸より位四ッ入三寸位四
五寸位
一同竪糸目方ハ一疋百二三十目より百六十目位迄
一縐紗太ぶ之元より捧へ巻蕊籠の如く成箱へ入ふし
皆時垂て元出せハ乾て太ぶ出るこ

天鵝絨織方

一織ハ垂の織物より羽を厚くよりを荒くす大凡曲
尺二尺三寸幅の織るて二十二ようより二十六ようを

を限りとし通例二十四ようを羽四見中ふを織るなり二
十六ようハ極ふを織るなり羽四るなり織一目へ四寸入
耳糸も四糸ハ四ッ入其外ハ如常地合ハ繻子地なり
耳ハ綾地なり織柄ハハ九百目位を羽四
一地綾元ハ投毛糸綾元二投都合六投なりて不殘
引なる仕をて織るなり地綾元ハ投毛糸綾元ハ二投なり
下壷へ竪糸を通し毛糸綾元ハ二投なりつがひへ
糸を通なり綾元へ竪糸通方ハ一の綾元へ一の糸二
の綾元へ一の糸二の糸三の綾元へ二の糸三の糸ハ
の綾元へ三の糸ハの糸を通す織花の方ハ毛糸の綾
元二投なり
一毛糸ハ織一目へ二寸より乃至六寸迄入るこ也例ハ
なへて中ふの物を織るなり但し糸ハ垂すぐ二寸合せ

炼り用ひ深ハ炼て後深てもう一又練なうら深むるゝ
一地蛭糸ハ生もの一ぢ糸を用ひ合せ糸ハ不用之 仮令
並もうゝハ細き糸 並もがうハ蚕六ッ七ッも多く附る
外の織物ハ生糸を用ゆとゝ雖も大凡ぢ練或ハ素黄
として用ゆるなり 天鵝絨の地合よかうり一切不練
其仮深て織るなり
一蛭糸ハ捻強きハ悪し 弱くして力のつよき糸を撰
なり 上州厩橋辺より出る糸ハ上品なめるゝ奥州福
島辺〻〻糸も不宜 奥州南部より出る糸を京師
抔ハ高く用ゆと云然を極上の糸と云ハ飛弾也
結田郡より出る糸なり 然も多く糸不出仍て当部
の産を大概上として用ゆるなり
一諸国より京師へ糸出る所〻大凡軍〻所を左るゝ

近江国より出る糸を濵糸と云美濃国より出る糸を
そたいゝゝ云 繻子ゝ用て極上の糸なりとを 飛深
国より出る糸を高山と云又堺田と云是ハ天鵝絨
ゝ用て極品ゝ云加賀国より出を白糸と云上州厩
橋より出るをまひ搗とも又むすひ糸とも云甲州より
出るを甲州と云奥州より出るなりも 押ぢて
当部福糸と両名を唱るなり 此糸天鵝絨ゝ用て上之
福ゝ糸ハ毛糸ゝ用て上なり 絹〻毛立なり 紅深
ゝて紅不強深也むなり 外の出の糸ハ紅深ゝハ深
付悪ゝ
一毛糸出五丈位 尤線鍋の大小ゝより毛糸の経天也
経あるべゝ
一中の品ゝて大凡糸積地蛭糸熱目三十目耳糸熱目

十五目横糸数目三十四五交位毛糸数目百廿目

一織り上り絲天一丈一天五寸位理天一丈三尺より

出積と以て織つまりと可知

一蹈竹五本へ綾五附方ハ左方と和と宮む一の竹へ四

の綾五二の竹へ三の綾五三の竹へ二のあやとりにの竹へ

一の綾五と附る但し織帛の方ハ毛糸の綾五二枚あり

此蹈竹を此の蹈竹の四の竹の次ハ一本めるハ毛糸綾

五の一と二と附る

一蹈竹蹈方ハ組糸を糸二擬持て織る左より和り毛

糸の蹈竹と地糸の一の竹と蹈て細き糸一杼右へ重又

左より地糸の二の竹と和き右糸一杼次ハ右の方より

毛糸と此の三とと和き右糸一杼次ハ地糸に平共ハ蹈

線鉄の筬と通す備右の方毛糸と此の三と蹈細糸一杼

左の方より此糸にと和き右糸一杼次ハ毛糸と地糸の一と

右糸一杼地糸にと和き蹈ハ和り金の杼と通す如此織る

織るあり但し線鉄と通したるめとハ細ぬきと通と和

べし此細ぬきハ同にへ二度織るハ細ぬきハ並のすが二

本又一本ハ五六本位

ぬきハ並すがにハ又ハ五六本位

あり口伝あり

一織上て小刀にて切り金の上と切れバ毛糸切るなり毛

不切にて再度時ハ箸にて切り金とぬきとる糸にハ伝

の如あり

一金花山織ハ天鵞絨の仕立にして毛糸を下へ附紋を

花模にて引き紋の出る所へ切り金と織り入るなり地糸ハ

捻り金糸と織る天鵞絨ハ三杼織れども金花山ハ二杼織なり

尚口伝

羅織方

一鯨尺一尺一寸幅の織十六よりより十五よりより織柄ハ二百目位なり

一地合ハ平綾ふして織一目へ生糸四ツ入すぐ一本糸なり綾丸へハ二本ツヽ引通す向の経ぬやゝ斗り一本ツヽよ成る横糸ハ巳五本より十巳五本迄綿ハ葛也用申竪糸いふのりと用申

一ふるひ一枠一と一枠又ふるひと一枠以上三枠ニて平綾よ成る但しふるひとい綾丸と共ニよりとけ色るすきり

一二と一枠一と一枠二と一枠此るよりすきり以上三枠平よ成る見より又糸の如く数度も用ゝ

一伏機二枚本機二枚見ハ常よ如く仕織外よふるひ一枚是ハふげてぶらくゝとトけ色く綾丸の糸ハてせら糸乃如く紡ぎ見と二本合せたる位よすべし

一耳糸通方ハたんゝ織なり和十目六本合せ三本ツヽ入紡合三十本へるゝふるひよて通してあやよ成る

一踊竹六本ゝ一の竹よふるひ二の竹よ一の綾丸三の竹ふふるひ巳の竹よ二の綾丸五の竹よ一の綾丸六の竹よ二の綾丸と附る

一紋羅ハ本ぞゝ二枚ふぐせ二枚外よ二枚合せて六枚其外よふるひあり

紋紗織方

一織ハ鯨尺ゝて一尺幅十五よりゝ又十巳よりゝ竪横ともきハ十三よりゝなり

一竪糸ハ蚕八ツ附ゝて一筋二本合せ織一目へ六本へる横糸ハ右ゝ糸七八本合よして用申

一紋紗ハ三枚からみとして綾糸本機三枚ニ又伏機も六枚掛る竪糸の通方ハ一二三一二三ツ通す伏機も同但し織目へ三本づゝ入るゝ ふるひ綾糸ハ三の綾糸へ入なる糸二本ずつ通す口傳

一想ふるひの綾糸をる物ハふるひの下をつと云なり 故ふるひと印のあるを以て知べし立口とハふるひの綾糸を踏上るなり

一ふるひに云ハ白の本機ふゝ上れハふるひの綾糸返りて上るをふるひにと云 右織方ハ立口一杼ふるひ一杼と交せて織る又別の竹ハ外綾糸を附垂て踏上る故ハふるひの綾糸返るゝ踏上げ方ハ口傳

一踏行口本なり附方如左

三 ― ― ― ― 一四

ツ音 ― ― ― ― 一三三五六 ― 二

三 ― ― ― ― 一四 ― 三

ツ音 ― ― ― ― 二三四五六 ― 四

右踏方ハ一二三四と唱ふる踏べし

一紋ハ花模なて引なり紋のあさ不の地ハ紗なり 尚

羅紗織方

一綿羊の毛を苅り糸ゝ製ス然も此獣ハ我邦ハまれなる物なり又綿羊の飼方毛の切様ハ習わりに傳とす先ハ狐狸の毛を用ひ其外の獣を用ひられ

ざるよめるに

一糸製方ハ油をぬさゝる毛を綿打て打如綿ゝ
ゝて綿引車ゝて本絃糸の如く引き糸ゝり自
湯ゝてゆでゝ糸づむまでゆでゝゝ此加減と知るべし
巻返ゝて干とがくでんの糊を付機ゝ延織る織ホ
て唐土ゝて煮其上をぬるまゆゝてゝゝ幾返も毛の
出る迄揉ゝり糸ゝりぬれるまゝの形を張り垂て明松
ゝて毛を焼又湯ゝて揉ゝり揉めハ毛出るがくでんに煮立て
ゝて引ゝり

一織ハ一寸三十七枚四十位までの織ゝ一目へ竪糸一本入る
竪ハ諸捻ゝ方細さかどよし横糸ハ片捻ゝり綾ゝ
ハ絹糸ゝ横一寸ゝ五五十四五ゝり六十位織ゝ
一毛を本綿糸の如く引出ゝ篠巻ゝ工ハ悪し長おさ
へて引ゝ村の不出様ゝ上手ゝ引べきゝり尚口伝あり

夏袴地織方 今云仙台平川越平精好平の類ゝり

一織幅一尺又一尺一寸位形数耳ゝゝ二十一よゝゝて
八百四十ゝり綾ゝ四枚ゝ目へつがいへ逆ナ逆方一三
二口糸組ハ生糸蛛糸ゝ糸歩交ゝさすゝり
一生糸ゝて深る竪ハ至て細し蚕七ッ附又八ッ附位を二
本捻りゝて織ゝ一目へ二本ッ入
一縞ハ蛛糸ゝて一本四本捻ゝて四ッ入ゝり是ハ縞乃
めつさゝ依て好ゝまゝせて左細ゝり
一耳糸太ゝまゝ三本ッ引ゝ六本入位ゝり
一竪糸織二本宛入ゝゝ右横糸ハ奥州糸ゝて蚕十本
後附る七八本又ハ十本位生糸ゝて深引揉て織ゝ
但織出し其結の地合を見て横糸ハ左細好次第ゝ
すべし横糸引揉ゝ繰ゝり繰ゝりぬるき湯ゝて浸し能く

ためし織れハ仙臺平の方より地合至て平ゝしてぬめり
あり乍然右の織方ハ至て六ヶ敷少しゝ休ゝ乾時い
樣ハ筋出るゝ其外たん〳〵堺目ゟる上手の織ゝ
めゝざれハ不能ゝ
一織方初ゝまゝ横糸を布ゝ包ゝ槌ゝて絡ゝ
ためさゝる織るゝ比地合ハ絹ゝぬめり少く見ゝる
とのゝ
一織上て後水張ゝする時少しゝふのりを薄く入て張
れハためし横の如く絹の地合絡く成ゝ織幅より
五分程幅つまる物ゝ為めさず織る時ゝ幅廣く
出来て張上ゝつまるとゝ為へし〳〵ゝ張りて糊をするハ
刷毛ゝて引ゝに倣
一川越平ハ右ゝ同〳〵糸細くするゝ

一精好平ハ糸〳〵大小厚薄ある斗ゝて其外ゝ如前
文

冬袴地織方 柳條虎珀丹後の類ゝ

一綾ハ裏物ゝ同し
一竪糸横糸共ゝ絲糸ゝ蚕八ッ附〳〵糸ゝ三本捻りて地
合厚くする時ハ四本捻りて綾へ一目ゝ四本入ゝする
綾元の糸数ハ裏袴の一倍揃て綾一目の内へ綾四ッ
宛ゝり綾元四枚通し方ハ一目の四本の糸ゝ一二三
四ゝ順ゝ通し又次の一目ゝ如此通すゝ此虎珀柳
條の類の綾ゝり
一柳條ハ竪横ゝも糸ゝ至て細く薄く織る故横ハ三本
位の引揃ゝり
一虎珀の横ハ十本ゝ十五本ゝ引揃好の厚ゝ織るゝ

来冬袴地ハ琥珀織之丹後もハし

一又如夏袴筬一目ハ二本宛入絡糸も地糸もハ一ツさ
ゝて二本ツ引揃て密練糸にて冬袴地と織るなり

布織方

一麻をうゝ紡てうせをなるを経て筬一目ハ一本ツ通し
ふのりを付る糊を引ハ藁たゝしにて両方共に絡操
やハらけふのりをなるゝ迄せ布の上より撫布の下ようにて
押すごくなり能付ル歩乾櫛にてとゝ〳〵巻ふのりハ糸の
ひるくゝ毛ばをおさゝ付筬のあるさゝくるなり

一糊を引時ハ出く処垂き糊をして天日にて干たゝら
勝へ巻なり

一餝り糸ハ一本垂にをるゝ筬ハ一目さし〳〵れ織上りハ本
木綿とハ遠ひ冬の表の如くに出来るゝ餝糸とハかちと

の事なり絡ハ平絡なり

一布晒方藁灰の灰水をとぎる濾にして清し其後垂に
釜の中へ入布を煮なり煮方ハ蒸なるより釈ル所迄も
とくと煮其後翌朝布を引上臼の中へ
入差渡三寸程の杵にて人春に突なり左本の
臼にてつく米或ハ餅をとつく程に強くハ突ハす好き
ほとを見て春なるを洗濯さぬく如此にするなり五
返程春〳〵るハすき出し〳〵突くへし布ハ浄水にて濁の
水の出る程にとくと突き洗ひぬくなり右の布を天
日にて乾なり但し河原又ハ茅の上へ引延て干し又土
の上にてもよく晴日に干乾ハ浄水を吹水の如くに村
なく水を歩ほうきにて掃てもよく乾くハ水赤なる一日
の内に凡十返程歩干上るなり右の如く干上布に出

んゝと然け糊を水にて落く延布の裏より刷毛にて引干上る如是する時ハ上晒なり 曰て突ことハ生糸のあくを抜ためゝ

木綿織方

一木綿機にて織る貫を引杼を歩次に筬を歩付 次ハ貫を引又貫を引杼を歩次に筬歩足を延て織る杼歩するハ耳の揃ふなり

一糸を緒ハ細き糸綿糸に節合にて機糊の後にて糊を付用ゆ方ハちらゝなり

一糊の仕方ハ粟を生にて用ゆ分料ハ一反に付ハ椀の中笠に一ツ糸と一反に煮粟のちんかも煮粥りゝ時分に熱水の中にて粟の沈るまて糸をゝゝ石の水をそゝ絞り上又とくと糸を揉ゝ糊の粕をたゝき出し釣干にほす但絞ハ米糊を用ゆ

一織上け晒方ハ布とハ同ゝ但ゝ木綿ハかゝ上け巻てきぬにて干べゝ

葛布織方

一葛粉を半夏過に取りたるを良とす半夏ハ元たるハ艶よくとゝ弱ゝ右葛かつらを絶き細に切釜に鍋に湯を入煮立て色の変る時分をお岩に湯より取り出ゝ一夜土中へねせ置けハ上皮べとくゝと成る其節水にへ洗ひ濯けハ上皮の悪きハ取去て麻を剥なる如く成を針にてさき糸にうゝてむゝ績にて織るなり

むゝ績ハ糸の内より引とる

織方ハ平織にて木綿地の如ゝ

機織彙編巻之四終

内閣文庫
内閣印
太政官文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan